

「防災に貢献」

地球の赤道上空に30°四方の巨大なレーダーアンテナを持つ静止気象衛星を打ち上げることで、台風の発生や勢力の強さ・進路をより詳細に観測でき、防災に大きく役立つ可能性が高いことが弘前大学、理化学研究所(理研)計算科学研究センター、宇宙航空研究開発機構(JAXA)などの共同シミュレーション研究で分かった。(福士和久)

静止気象衛星

巨大アンテナ搭載、台風観測詳細に

弘大からは大学院理工学研究科の岡崎淳史助教(34)が参加。コンピュータの中に仮想の台風を再現し勢力を予測するという、研究の肝となる部分を手掛けた。研究は2016年から4カ年のJAXA委託事業。グループ代表は理研の三好建正・データ同化研究チームリーダー。内容は米科学誌「ジャーナル・オブ・アドバンス・イン・モデリング・ア



岡崎 淳史助教

弘大・岡崎助教ら解析

「ス・システムズ」に7日付で掲載された。JAXAはこの研究成果を新たな気象衛星の打ち上げ検討の材料にする、とみられる。日本は現在、約2°四方のアンテナを持つ降水観測衛星を高度約400kmの周回軌道に投入している。しかし地球を周回するため、地上の同じ場所を常時観測し続けることはできなかった。ただ、同じ場所を常時観測できる静止軌道は、周回軌道に比べ地上から約90倍も遠い3万6千kmの所にある。そのため研究では、観測精度を上げることを目的に30°四方の巨大なアンテナを持つ衛星を想定した。アンテナの大きさはJAXAが設定した。さらに観測精度を高めるため、少しずつアンテナの画角を変えながら、同じ場所を重複して調べる方法を取り入れることで、遠くからでも高い精度で台風の姿を捉えられることも分かった。岡崎助教は「この研究成果により、将来災害の軽減につながればうれしい」と話している。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。

東奥日報社に無断で転載することを禁止します。

[問合せ先]弘前大学理工学研究科

E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp